身近なまちの風景物語(31)

拡張する想像

建物の裏から、刀を脇に差した侍が出てきそうな感じがする。丁髷（ちょんまげ）を結った武士、日本髪の女性、少なくとも和装が似合う風景だ。

ただよく見ると、時代劇で見る建物とは少し違う。江戸時代ではなさそうだ。

近世の建造物は武家屋敷や商家などがわずかに残っている。近世城郭は天守、城門や櫓に象徴されるように、その姿に対するイメージを持ちやすい。

しかしそれ以前、すなわち中世の建造物は京都の商家などが描かれた屏風絵などから類推されている。ましてや中世城郭の建造物は残っていないのでイメージしにくい。文献記録にわずかに記された建造物の規模や特徴などから、その姿を想像するしかない。

ただ好奇心とはいえ想像するのは楽しい。織田信長による安土城は、既に明治時代にもその姿が想像されている。現在までに幾つもの安土城が描かれている。

中世城郭の本格的な整備は一乗谷朝倉氏遺跡（福井市）からである。注目を浴び、その後、いくつかの中世城館跡が整備された。

発掘調査の進展に伴い、文献では明らかにされていなかった建築上の様々な諸元がみえてきている。遺構から、土地の形状や建造物の位置などがわかる。礎石や柱穴から、柱の太さ、柱間の長さ、その柱にかかる荷重などを推し量り、当時使用されていたとみられる材料、技術をもとに、より確からしさを増して建造物の姿を描くことができる。

当初は遺構の平面表示だったが、平成に入ると、建造物再建へと舵が切られた。その初めての取り組みが逆井城址（茨城県坂東市）だった。時代考証を重ね、できるだけ忠実さを求めた試行だった。挑戦でもある。その後に与えた影響も大きく、中世・戦国期の城郭整備の嚆矢となった。

数十年を経ると、その後の各地での研究成果を背景に違和感も指摘されている。しかしこうした想定復元の建造物に対して、本当にそうだったのかなと疑いの目を向けるよりも、その時代にタイムスリップした自分の姿を想像して楽しみたい。

野中 勝利
筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長

挿絵：久田琳佳子（筑波大学大学院博士前期課程１年）